

常念通り

白板地区公民館
館報編集委員会
☎(35) 7740

コロナ禍の雛飾

2月22日(火)に公民館職員で事務所に七段飾り1基、多目的室には御殿飾り、1階ホールに松本押絵雛等の飾り付けを行いました。

今回の七段飾りは、貝桶がついているものです。貝桶は「貝合わせ」という遊びに使う貝殻をしまったためのもので、内裏雛と一緒に一段目に飾ります。貝合わせとは、平安時代に起源があるとされる遊びの一種で、古くは旧暦の日数に合わせて360個もの貝殻の中から、同じ装飾・同じ形

の片割れを探し合わせて遊んでいました。

松本押絵雛は、歴史は古く江戸時代には庶民のお雛様として地方を中心に全国各地で作られていました。特に松本は全国的な産地として有名で、士族の妻女が製作して商人が売り歩く形で県内のみならず県外にも販売しており、明治初期には生産の最盛期を迎えました。その後、立体的な雛人形が全国に流通する等して、明治後期になると生産が衰え、ついには生産者が途絶えてしまいました。明治期の生産だと思われる押絵雛も展示しています。



事務所前の七段飾り



松本押絵雛

1枚の写真

ウェストンと松本城

白板地区公民館 館長 内藤哲夫

松本市史研究第25号の「松本城天守閣から撮影された明治古写真について 丸山哲治」の文中に天守閣より西方を写した写真があります。年代は明治26年春から29年春までの間の撮影(南方を写した写真から推測)と思われますが、撮影時期は不明です。

明治24年8月2日(日)、ウォルター・ウェストンは松本城の最上階で景観を楽しんでいます。写真のような景色を見ていたと思われます。

明治29年(1896)イギリスで刊行した『日本アルプスの登山と探検』の96ページに松本城の写真が掲載されています。松本城天守の姿が海外に紹介されたのは、これが初めてだと思われます。

又、18頁には松本城についてこんな記述が、(ウェストンはこの時、上田から保福寺峠を越えて松本に到着しています)。

『町の北はずれに古い城があつて、パゴダのような塔がひろびろとした水田と桑畑の中に聳えている。それは巨大なチェスボードの上に置かれた城の駒(キャッスル)のよ

うに見えた。城壁の白壁はかなり剥けているが、古い天守閣は荒廃しながらもなお威容を保っていて、最上階に立つと、平野の西に聳える雄大な山々がすぐ目の前に迫ってきた。』とあります。

翌8月3日(月)午前9時に松本を出発し徳本峠を経て横尾本谷経由で槍ヶ岳を目指しました。(天候悪化により登頂を断念しました)

この写真、天守閣から西方の写真ですが、城山から遠く常念岳や北アルプスの山々が写っています。ウェストンは、保福寺峠で見た槍ヶ岳をここでも見たと推察します。

水田や桑畑が広がっているようですが、写真中央右上の建物は木澤のお寺「正隣寺」です。その周辺には集落があります。

右下に松本城の若宮八幡社が写っています。現在は松本神社境内の西側

常念岳 横通岳 大天井岳 有明山



明治26年春から29年春頃の撮影 天守閣より西方を望む
ウェストンは、「雄大な山々がすぐ目の前に迫ってきた」と表現

に移築されています。左上は、現在は住宅地となっていますが、まだ人家など無く広々としています。

明治35年3月に、長野県立代用松本町立高等女学校(現長野県松本蟻ヶ崎高等学校)が校舎新築移転していますがやはり水田の中にポツンと校舎が建っているのを別の写真で確認できます。

時が経過しても変わらない山の風景が私たちの目の前に存在しています。

公民館では「明治・大正時代の古写真展」を開催しています。

自治の鐘 丸ノ内中学校

21

開かれた生徒会

丸ノ内中学校では、三年生から二年生へ、生徒会運営のバトンが渡され、新生徒会がスタートしました。

令和三年度を振り返ってみると、「発」を大目標に掲げ、丸中三本柱である「挨拶」「清掃」「合唱」を意識して、日々生活してきたことが思い出されます。新型コロナウイルス感染症の影響もありましたが、目標に向かって様々な活動に取り組むことができました。

その中で、特に印象的だったのは、十月に行われた学芸発表会です。体育大会の協力リレーでは、仲間と協力し合い、全力を尽くすことができました。大縄跳び(8の字跳び)では、どのクラスも仲間同士で声を掛け合いながら一生懸命自分たちの記録に挑戦しました。勝ち負けはもちろんありますが、クラスが団結する、とても素晴らしい機会になりました。

また、十一月に延期された音楽会では、クラスで力を合わせて練習してきた一つの曲を、本番の緊張感の中歌い上げ、達成感を得ることができました。

ました。特に、三年生の合唱には、全校が感動しました。音の強弱があり、一つ一つの歌詞に想いを込めて歌っていることがよく伝わり、三年生の合唱にかける思いの強さを感じました。

そんな三年生を含めた今までの先輩方が受け継ぎ、守ってきたくださった伝統ある丸中生徒会を、今度は私たちが引き継ぐ番です。

私たちは今まで、学年目標「想・奏・創」のもと、学年生徒会を組織して活動してきました。そこでは、自分たちで課題を考え、課題解決のための計画を立て、友達と意見を交わしながら学年を創っていました。

この経験をもとに、一人ひとりの意見を尊重し、みんなで創る『全員参加の開かれた生徒会』を目指していきたいです。

丸ノ内中学校の生徒によって、代々受け継がれている「自治の精神」のもと、全校みんなで一致団結し、より良い学校創りができるよう努めていきます。



講座からの探究

城山マリア館について

白板地区公民館 主事 岩垂宏直

9月の水めぐり講座の参加者から、蟻ヶ崎に異人屋敷があったが詳細について知らないかと言う。質問をいただきました。

ふと、松本市美術館所蔵の奥田郁太郎『城の見える町雪景註1』(1959年)を見て「外国人が建てた家が蟻ヶ崎にあった」と来館者から感想をいただいたことを思い出し、当該、奥田作品を当たってみましたが洋館のようなものは確認できず、結局詳細は分かりませんでした。

先日、コロナ禍での活動として地域資料の整理をしていると『松本平の近代美術展註2』の図録説明に中村善策という画家が「城山マリア館を写生した作品を展覧会に出品し入選した。」との記述を見つけました。

早速、中村の記念室がある市立小樽美術館へ問い合わせたところ、「画友宮田熊雄に誘われ、彼の郷里松本で制作する。松本城山にて、マリア館を写生、『風景』と題して第12回二科展(1925年)に出品する。」と記述を確認し、「小樽美術館は『城山マリア館の

ある風景』を所蔵し、その建物を描いた作品で間違いないと思います。」と回答をいただきました。

この建物の正式名は聖マリア館で、周辺の住民が異人屋敷(異人館)、城山マリア館などと呼んでいたそうです。

明治期、カナダ人宣教師F・Wケネディ司祭の住宅と信者の寮を兼ねた2階建て2棟の洋館でバルコニーや敷地にはテニスコートまでありました。松本聖十字教会が1957年に大名町から現地の鷹匠町へ移築された際、マリア館の一部もそちらへ移され蟻ヶ崎にはその痕跡が残っていません。

参加者の質問から地域を紐解き、遠く函館の地に白板地区の風景作品が収蔵されていることに感慨を覚えました。

寄贈された
マッチ棒で製作の松本城

2月7日(月)、松本城案内ボランティアの山本英男さん(白板南)を通じて、マッチ棒で製作された松本城が寄贈されました。

昭和40年代に赤宏昌一さんが制作したものを妻の陽子さんが保持していましたが、亡くなり甥の川久保さんが展示場所を探していました。

多目的室に展示していただきます。



現在は当時の面影はありません

小樽美術館からいただいた図版は公民館にありますので、興味のある方はお越しください。また、マリア館についてご存知の方がおりましたら、お話を聞かせてください。

註1 城山公園入口・開松古墳周辺から松本城を展望した作品

註2 『松本平の近代美術 美術館を夢見た作家たち』松本市美術館2007年